# 貞元期における韓愈と孟郊の贈答詩について

## ―比興と賦體の角度から―

丸井　憲

はじめに
一、比興と賦體
二、賦體が持つ表現機能
三、韓愈と孟郊の贈答詩（貞元期の作）
おわりに

## はじめに

我年二十五　　我れ年二十五
求友昧其人　　友を求めて其の人に昧し
哀歌西京市　　哀歌す　西京の市
乃與夫子親　　乃ち夫子〔李觀〕と親しむ

――韓愈「北極一首贈李觀」（五古、貞元八年〔七九二〕以前）

自聞喪元賓　　元賓〔李觀の字〕を喪ふと聞きしより
一日八九狂　　一日に八九たび狂ふ
沈痛此丈夫　　此の丈夫を沈痛し
驚呼彼穹蒼　　彼の穹蒼に驚呼す

――孟郊「哭李觀」（五古、貞元十年〔七九四〕）

筆者は「韓愈の青年期における交遊とその贈答詩の特徴―李觀に贈った詩二首を中心に―」（『中唐文學會報』第二十一號所收、二〇一四）という小論（以下「前稿」と呼ぶ）において、薄命の才人・李觀（七六六―七九四）に贈った韓愈詩を中心に、李觀・孟郊（七五一―八一四）・韓愈（七六八―八二四）らの交遊の模様を整理するとともに、彼らの間で應酬された贈答詩にはいかなる特徴が見られるか、という角度からも初歩的な検討を

行なった。

大曆期の詩壇の主流を占めていた、いわゆる十才子らの離別詩や贈答詩は、常套的な言葉と近體的な形式とを有するものが多かった。しかし貞元期に入ると、主として韓愈や孟郊が、現實に基づく新鮮な內容と、古體詩という自在な形式とを用いて、その交遊のありさまを生き生きと描く文學を作り始めた。當時彼らの間で應酬された贈答詩には一定の影響關係が認められるが、特に詩型では五言古詩が多く用いられ、詩中には「比興」（暗喩や寓意）という先秦漢魏以來の傳統的な修辭技法を用いながら、また一方では「賦體」（直敍）という要素をも多分に取り入れたものとなっている。本稿では主として韓愈と孟郊の間で貞元期に應酬された贈答詩を中心に、その比興と賦體の比重や配分、とりわけ賦體部分の構成要素と表現機能について分析を加えてみたい。

本稿で扱う韓愈詩は、前稿と同樣、錢仲聯氏の『韓昌黎詩繫年集釋』上下冊（上海：上海古籍出版社、一九八四。以下『集釋』と略稱）に據る。同時に屈守元・常思春兩氏主編『韓愈全集校注』全五冊（成都：四川大學出版社、一九九六。以下『校注』と略稱）および郝潤華・丁俊麗兩氏の整理になる清・方世擧著『韓昌黎詩集編年箋注』上下冊（北京：中華書局、二〇一二。以下『箋注』と略稱）をも參照し、作品解釋にかかわる異同がある場合にはその旨明記する。なお、孟郊詩のテクストについては四部叢刊本『孟東野詩集』に據り、作品解釋にあたっては邱燮友・李建崑兩氏の『孟郊詩集校注』上下冊（臺北：新文豐出版、一九九七）および齋藤茂氏の『孟郊研究』（東京：汲古書院、二〇〇八）を參照した。

## 一、比興と賦體

比興と賦體、とりわけ前者に關する研究は、遠く漢代に始まり、宋代に再び活發化し、そして清代から近代にかけては「比興學」とも呼びうるほどの活況を呈した。賦・比・興三體の解釋については、漢・宋・清の三代において實にさまざまな見解があるが、管見によれば、それらの見解はもっぱら比と興とわけ後者に集中しており、賦體についての議論は少ない。南宋の朱熹の『詩集傳』（四部叢刊廣編本）には、

（一）興とは、先づ他の物を言い、以て詠ずる所の詞を引起するなり（興者、先言他物以引起所詠之詞也）。〔周南「關雎」〕

（二）賦とは、其の事を敷陳して直に之を言ふ者なり（賦者、敷陳其事而直言之者也）。〔周南「葛覃」〕

（三）比とは、彼の物を以て此の物に比するなり（比者、以彼物比此物也）。〔周南「螽斯」〕

とあるが、三體それぞれの定義としてはこれが最もわかりやすい。比體と興體を「比興」と併稱するのは、南朝梁の鍾嶸の『詩品』總論や劉勰の『文心雕龍』比興第三十二にすでに見えるが、唐代においてこの語が文學の復興の旗印として理念化[1]されると、再び政治的な含意（美刺諷諫）を持つようになった。松浦友久氏は、中國詩歌における「政治性の强さ」は「詩歌にとって最も重要なポイントの一つというべき『隱喩（メタファー）』や『寓意（アレゴリー）』の問題がもっぱら政治的な『美刺比興』の問題として扱われてきたところにも、端的に表れている[2]」と述べている。

つまり比興とは隱喩や寓意を總稱したものであり、賦體とは事物をそのまま直敍し、あるいは作者の思想や感情を直に訴える部分である、といえるであろう。そして比興のうちの「興」の要素が、比興と賦體との連絡の機能を擔っていると考えられる。たとえば『詩經』周南「關雎」の冒頭の、

關關雎鳩　在河之洲　　關關たる雎鳩は、河の洲に在り
窈窕淑女　君子好逑　　窈窕たる淑女は、君子の好き逑（つれあひ）。

とあるうちの初二句が「興」にあたり、これが後續する賦體の二句を「引起」（前述の朱熹の語）する役割を擔っているのである。吉川幸次郎氏はこの「興」を「ある主題を歌うにさきだち、歌わんとする主題に似た現象を、自然の中に見いだし、それによって歌いおこす技法」とし、「それは自然と人間との微妙な交響を、意識的に、あるいは意識せずして、指摘するもの[3]」と定義している。そしてこうした「興」の技法は、後漢（推定）の「古詩十九首」其三の冒頭の、

青青陵上柏　　青青たり　陵上の柏（はく）
磊磊澗中石　　磊磊たり　澗中の石『（以上、比興）
人生天地間　　人の天地の間に生まるるや[5]
忽如遠行客『　　忽として遠行の客の如し[4]』（以上、賦體）

といった前後二句ずつの關係に受け繼がれている。ただ、比興と賦體の間には論理的關連性があるとは必ずしもいえず、興句の含意（興意）の分析や解釋は古來、諸說入り亂れる狀況を呈してきた。葛曉音氏は、漢魏の五言詩における比興（特に情景描寫）のこうした論理的飛躍（葛氏原文は「跳躍性」）こそが、情景描寫に寓意を籠めることを可能にしたと述べている[5]。

## 二、賦體が持つ表現機能

中國古典詩が持つ表現機能は、大まかに分類すれば、寫景・詠物・典故・敍事・抒情・說理（議論を含む）の六種にまとめることができよう。このうち寫景と詠物は、前述のとおり、比興の機能を兼ねた形で漢魏以來の詩に出現し、かつ典故とともも

に、後半三者すなわち敍事・抒情・說理を導く役割を擔っていることが多い。寫景と詠物が獨立した價値を持つのは、南朝宋の謝靈運と南朝齊の謝朓が、山水詩や詠物詩を樣式として確立してからのことであり、それらは後世、齊梁體や近體詩（五排を除く）という篇幅の比較的小さな作品において發達したものである。本稿では、漢魏以來の五言詩を、それら六朝以降の新たな樣式とは區別して論を進める。

上述の表現機能を、交遊や友情を主として扱う贈答詩の內容に卽して整理すれば、次のようになるだろう。

① 寫景：風景を寫す。多く比興の機能を兼ね、敍事・抒情・說理を導く。
② 詠物：事物を詠ずる。同右。
③ 典故：故事に典る。比興に似た效果を有し、敍事・抒情・說理を導く。
④ 敍事：人事を敍する。交遊のありさまが生き生きと綴られる。
⑤ 抒情：心情を述べる。交遊における率直な感情が述べられる。
⑥ 說理：道理を說く。交遊の歷史的意義がしばしば說かれる。

三國魏の曹植には「贈徐幹」「贈丁儀」「贈王粲」「贈丁儀王粲」「贈白馬王彪」「贈丁翼」といった五言詩があり、いずれも記名性を伴う友情詩や交遊詩の先驅けをなす。[6] ここでは「贈徐幹」詩を例に取り、比興と賦體の配分や比重がどのようになっているのかを見てみよう。

贈徐幹（徐幹に贈る）　曹植

1 驚風翻白日　驚風　白日を翻し
2 忽然歸西山　忽然として西山に歸る
3 圓景光未滿　圓景〔月〕　光未だ滿ちず
4 衆星燦以繁』　衆星　燦として以て繁し』
（以上、①寫景＝比興）
5 志士營世業　志士は世業を營み
6 小人亦不閑　小人も亦た閑ならず
7 聊且夜行游　聊且（しばら）く夜行きて游び
8 游彼雙闕間』　彼（か）の雙闕の間に游ばん』（以上、⑤抒情）
9 文昌鬱雲興　文昌〔殿〕　鬱として雲の興るがごとく
10 迎風高中天　迎風〔閣〕　中天に高し
11 春鳩鳴飛棟　春鳩　飛棟に鳴き
12 流飈激櫺軒』　流飈　櫺軒（れいけん）に激す』（以上、②詠物＝比興）
13 顧念蓬室士　顧みて念ふ　蓬室の士〔徐幹〕
14 貧賤誠足憐　貧賤　誠に憐れむに足る

15 薇藿弗充虛　薇藿〔粗食〕　虛しきを充たさず
16 皮褐猶不全　皮褐〔粗衣〕　猶ほ全からず
17 慷慨有悲心　慷慨して悲心有り
18 興文自成篇』　文を興せば自づから篇を成す』

（以上、④敍事）

19 寶棄怨何人　寶は棄てらるるも何人をか怨まん
20 和氏有其愆　和氏に其の愆有り
21 彈冠俟知己　冠を彈きて知己を俟つも
22 知己誰不然』　知己　誰か然らざらん

（以上、③典故＝比興）

23 良田無晩歲　良田に晩歲〔晩い收穫〕無く
24 膏澤多豐年　膏澤〔慈雨〕に豐年多し
25 亮懷璵璠美　亮に璵璠〔美玉〕の美を懷けば
26 積久德愈宣　積むこと久しくして德は愈よ宣らかなり
27 親交義在敦　親交〔親友〕　義は敦きに在り
28 申章復何言』(7)　章を申ねて復た何をか言はん(8)』

（以上、⑥說理）

徐幹（一七〇―二一七）、字は偉長、「建安七子」の一人に數えられる。建安十二年（二〇七）までには魏公・曹操の幕下に入って司空軍謀祭酒に任ぜられ、同十九年（二一四）頃には、當時平原侯から臨菑侯に遷っていた曹植の下で「文學」として仕えたという（『晉書』卷四四「鄭袤傳」）。また、曹丕とも親交があり、「彬彬たる君子」（曹丕「與吳質書」）と稱えられたが、晩年は貧窮を極めた。『中論』二十余卷があり、曹植の上掲詩第五句の「世業」はこの業績を指す。この詩は建安二十一年（二一六）の作とも推定されるが、翌二十二年（二一七）に流行した疫病のため、徐幹は數え年四八歲で命を落とした。

曹植は漢代の古詩に範を取り、比興を多く驅使した詩人として知られるが、管見によれば賦體（敍事・抒情・說理）の使用もまた少なくない。上掲詩の寫景句や詠物句は、後續する賦體を導く役割を確かに擔っており、また賦體の處々に交遊の理想と現實に關わる樣々な用語をちりばめ、總體として貴賤にとらわれない友情の尊さを强調する仕組みになっている。このように比興（あるいは典故）と賦體とが交互に繰り返される體裁は、後世の詩人たちにも影響を與えた。下掲の孟郊の贈詩と比較すれば、その影響の一端が推し量られよう。

贈李觀（李觀に贈る）　孟郊

自注：觀初登第（〔李〕觀、初めて第に登る）

1 誰言形影親　誰か言はん　形影親しむと
2 燈滅影去身　燈滅すれば　影は身を去らん
3 誰言魚水歡　誰か言はん　魚水歡ぶと
4 水竭魚枯鱗』　水竭るれば　魚は鱗を枯らさん』

5昔爲同恨客　昔は同に恨むの客爲りしに
6今爲獨笑人　今は獨り笑はるるの人と爲る
7捨予在泥轍　予を捨てて泥轍に在らしめ
8飄跡上雲津』　跡を翻して雲津〔天の川〕に上れり』
（以上、③典故＝比興）

9臥木易成蠹　臥木　蠹と成り易く
10棄花難再春』　棄花　再びは春なり難し』
（以上、⑤抒情）

11何言對芳景　何ぞ言はん　芳景に對ふと
12愁望極蕭晨』　愁ひて望めば　蕭晨極まる』
（以上、②詠物＝比興）

13埋劍誰識氣　埋劍　誰か氣を識らん
14匣絃日生塵』　匣絃　日に塵を生ず』（以上、⑤抒情）
15願君語高風　願はくは君　高風〔秋風〕に語り
16爲余問蒼旻』[9]　余が爲に蒼旻に問はんことを』
（以上、③典故＝比興）

＊五言古詩。上平聲「眞」韻：身・鱗・人・津・春・晨・塵・旻。

【大意】身と影とは常に一緒とは言いきれまい、燈が消えれば影は身を離れるからだ。魚と水とは常に一緒とは言い切れまい、水が涸れれば魚はたちまち干からびてしまうからだ。』

以前はともに不遇を嘆いていた仲だったのに、今では私一人が笑い物。君は私を泥濘の中へ捨て去り、身を翻して高々と舞い上がってしまった。』

倒れた木は蟲に喰われやすく、棄てられた花に春は二度と訪れない。』

美しい春景色に對するのでなく、愁い顔で望むのは寒々とした秋の日の朝。』

埋もれた名劍の鋭氣に一體誰が氣づいてくれよう。匣にしまった琴は日に日に埃をかぶる。』

君には、秋風と語らって、私のために青空の意向を尋ねてもらいたいものだ。

孟郊の自注から、この詩は李觀が進士科に及第した貞元八年（七九二）以降に作られたものであることがわかる。前稿で整理したとおり、梁肅の門下生として共に學んだ李觀・韓愈・孟郊の三人のうち、この年は李・韓の二人が及第し、孟郊はふたたび落第の憂き目を見た。第五句から第八句までの賦體がそうした心境を自嘲氣味に綴っているが、三人ともみな、この年の應試が實は初めてではなく、過去數年のあいだは共に傷を嘗め合う閒柄であったことが察せられる。そしてこの四句を導く役割を擔っているのが第一句から第四句までの典故であって、第

四句の「枯鱗」は第七句の「泥轍」とともに『荘子』外物にある轍鮒の故事を踏まえる。

第九・十句は、ここでは明らかに「興」として働いており、次の第十一・十二句を導いている。「難再春」とあり「極蕭晨」とあるので、春はすでに過ぎ去り、いまは秋だということがここで明かされる。

第十三句の「埋劍」は『晉書』巻三六「張華傳」に見える雷煥の故事。また第十四句の「匣絃」は『呂氏春秋』巻一四「本味」に見える伯牙と鍾子期の「知音」の故事。この聯はさらに杜甫「人日二首」其二の「佩劍 星を衝きて 聊か暫く拔き、匣琴 水を流して 自ら須らく彈くべし（佩劍衝星聊暫拔、匣琴流水自須彈）」（『杜詩詳注』巻二一）をも意識しよう。こうした典故の使用が最終聯を導き、第十五句では漢代の古詩や魏の曹植の詩にしばしば見られる「願～」から始まる措辭[10]を用いて締めくくっている。

このような體裁がいわば漢魏の古詩を模した「擬古詩」の基本形をなすのであろう。比興（あるいは典故）と賦體の均等な比重や交替が、前掲の曹植詩の構造ともよく符合する。

## 三、韓愈と孟郊の贈答詩（貞元期の作）

さて、韓愈の初期の離別詩や贈答詩には、その詩題からも窺われるように、一定の制作意圖を有する一連の作品群があることは、小論「青年韓愈の長安交遊詩（一）陳羽を送る詩」（『中國詩文論叢』第三十二集所收）の頃から筆者が指摘してきたとおりである。そして下掲の韓愈詩もまた、その一連の作品内に位置づけられるべきものである。これらの作品群は、韓愈がその多感な青年期を送る閒に交遊した友人たちの群像を、克明に記録するために作られたもののように筆者には思われる。

長安交遊者一首贈孟郊

（長安にて交遊せる者 一首 孟郊に贈る） 韓愈

1 長安交遊者　長安にて交遊せる者
2 貧富各有徒　貧富各〻徒有り
3 親朋相過時　親朋相ひ過ぎるの時
4 亦各有以娛　亦た各〻以て娛しむ有り
5 陋室有文史　陋室に文史有り
6 高門有笙竽　高門に笙竽有り
7 何能辨榮悴　何ぞ能く榮悴を辨ぜん
8 且欲分賢愚　且く賢愚を分かたんと欲す

『韓詩外傳』（以上、⑥說理）

＊五言古詩。上平聲「虞」韻：徒・娛・竽・愚

【語釋】○陋室　陋屋。前漢の韓嬰『韓詩外傳』巻五に「彼の大儒なる者は、窮巷・陋室に隱居し、錐を置くの地無しと雖も、而れども王公 之と名を爭ふこと能はず（彼大儒者、雖隱居窮巷陋室、無置錐之地、而王公不能與之

爭名矣)」。○文史　文學・史學に關する著作や知識。『晉書』卷三六「張華傳」に「身死するの日、家に餘財無く、惟だ文史の机筐に溢るる有るのみ（身死之日、家無餘財、惟有文史溢于机筐）」。○高門　富貴の家を指す。○笙竽　ともに雅樂に使われる管樂器。形狀が似ており、笙は十三、竽は三十六のリード（簧）を持つ。ここでは富貴の象徴。

【大意】ここ長安で交際する者の中には、貧者もいれば富者もいる。親類や友人が行き來する時にも、それぞれに樂しみ方というものがある。『

貧者の陋屋では文學や史學の書物が讀めるし、富者の邸宅では雅樂の演奏が樂しめる。人の世の榮枯盛衰を辨別することなどできないのだから、當面は賢者と愚者とを分別し、賢者との交際を選ぶのがよいだろう。

この詩は貞元九年（七九三）に韓愈が孟郊から「長安羈旅行」や「長安道」などを見せられ、その悲痛な思いを和らげるために贈ったもの。清の方世舉は「蓋し（孟）郊に怨誹の言有るを以て、故に此を以て其の意を廣うせしならん（蓋以郊有怨誹之言、故以此廣其意）」（『箋注』第一六頁）と分析する。孟郊の「長安羈旅行」の前半部分は、

1 十日一理髮　十日に一たび髮を理へ
2 每梳飛旅塵　梳る毎に旅塵飛ぶ
3 三旬九過飲　三旬に九たび過飲し
4 每食唯舊貧』　毎に食ふは唯だ舊貧のみ』

（以上、④敍事）

5 萬物皆及時　萬物　皆時に及ぶも
6 獨余不覺春　獨り余れ　春を覺えず
7 失名誰肯訪　名を失へば　誰か肯へて訪はん
8 得意爭相親』　意を得れば　爭ひて相ひ親しむ』

（以上、⑤抒情）

……

このように賦體で構成されているが、隔句對を疊みかけ、かつ數詞を多用するなど、リズム感に富む歌い出しになっている。また當時は詩を贈答する際、しばしば相手の作品の體裁・樣式・風格を踏まえて應酬する慣習があったので、前掲の韓愈詩が全篇賦體で構成されているのは、あるいはその慣習に則ってのことかもしれない。しかしそうした慣習も、應酬を重ねる過程で次第に「習い性」となり、自身の作風にも影響を及ぼしてゆくようになる。韓愈の五言の贈答詩には、比興に據らず、もっぱら賦體を多用する傾向が見られるが、その端緒の一つとなったのが、孟郊との詩の贈答という經驗だった。なお、貧富と賢愚

にまつわる典故や比喩が多いのも、交遊の模様を詠う贈答詩の特徴の一つであるが、これは先に取り上げた曹植の「贈徐幹」詩にも顯著に見られたものである。韓愈や孟郊とほぼ同時代の劉禹錫（七七二-八四二）にも有名な「陋室銘」という作品があるとおり、とりわけ「貧＝賢」＞「富＝愚」とする價値觀は、先秦漢魏の詩文を好んだ中唐の文人たちの間で共有されていた可能性がある。

答韓愈李觀別因獻張徐州

（韓愈・李觀の別るるに答へ、因りて張徐州に獻ず）　孟郊

1富別愁在顏　富別　愁ひは顏に在るのみ
2貧別愁銷骨『　貧別　愁ひは骨をも銷かす』　（以上、⑥說理）
3懶磨舊銅鏡　舊き銅鏡を磨くに懶し
4畏見新白髮『　新たなる白髮を見るを畏る』　（以上、⑤抒情）
5古樹春無花　古樹　春に花無く
6子規啼有血『　子規　啼きて血有り』（以上、②詠物＝比興）
7離絃不勘聽　離絃　聽くに堪へず
8一聽四五絕『　一たび聽けば四五たび絕ゆ』　（以上、⑤抒情）
9世途非一險　世路は一たびの險に非ず
10俗慮有千結『　俗慮は千たび結ぼるる有り』　（以上、⑥說理）
11有客步大方　客有り大方に步まんとし
12驅車獨迷轍『　車を驅りて獨り轍に迷ふ』（以上、④敍事）
13故人韓與李　故人　韓と李とは
14逸翰雙皎潔　逸翰　雙つながら皎潔たり
15哀我摧折歸　我が摧折して歸るを哀しみ
16贈詞縱橫說『　詞を贈りて縱橫に說く』（以上、④敍事）
17徐方國東樞　徐方は國東の樞にして
18元戎天下傑　元戎は天下の傑なり
19禰生投刺遊　禰生は刺を投じて遊び
20王粲吟詩謁　王粲は詩を吟じて謁す
21高情無遺照　高情　遺照無く
22明抱開曉月　明抱　曉月を開く
23有士不埋冤　士有らば埋冤せず
24有讎皆爲雪『　讎有らば皆な爲に雪ぐ』　（以上、張建封への獻辭）
25願爲直草木　願はくは直き草木と爲りて
26永向君地列　永へに君が地に向いて列せん
27願爲古琴瑟　願はくは古き琴瑟と爲りて
28永向君聽發　永へに君が聽に向ひて發せん
29欲識丈夫心　丈夫の心を識らんと欲せば

30曽將孤劍說』　曽ち孤劍を將て說かん』（以上、⑤抒情）

＊五言古詩　入聲「月」韻：骨・髮・謁・月・發

「屑」韻：血・絕・結・轍・潔・設・

傑・雪・列・說

【語釋】○禰生　禰衡。後漢末から建安初期にかけての人で、傲慢をもって知られた。建安の初め、遷都後の許に至ったが、懐にした名刺を差し出す相手が見つからず、ついに名刺の文字が摩滅したという（『後漢書』卷八〇「禰衡傳」）。○王粲　「建安七子」の一人。記憶力と文才に優れ、曹操が魏公になると、その侍中を務めた。曹植とも親しかった。

【大意】富める者たちの別れは愁い顔になる程度だが、貧しい者たちの別れは骨をも溶かすほど切實だ。愛用の鏡を磨くのさえ億劫なのは、白髮がまた增えたのを見るのが怖いからだ。』

枯れ木には春でも花は咲かず、ホトトギスは血を吐いて啼くばかり。』

別れの琴曲は聽くに堪えない、ちょっと聽くだけで絃が何度も切れる（胸が締め付けられる）から。』

人生には多くの危險が待っており、それを心配するだけで心は千々に結ぼれる。』

見識あるお方を訪ねるべく、車を驅ったが、ひとり道に迷うばかりだ。』

友人の韓愈と李觀は、ともに詩文の素晴らしさで知られるが、私が挫折して國へ歸るというので、詩を私に贈り、言葉を盡くして慰めてくれた。』

徐州は我が國東部の樞要の地だし、張建封殿は天下の英傑。禰衡（のような權力者に嚴しい者）でさえ名刺を通じたいと訪ねて行くし、王粲（のような文才の優れた者）も詩を吟じて謁見を求めに行くほどだ。張殿の情の深さが及ばない者はなく、その抱負は曉の空に殘る滿月のよう。士人に怨みを抱く者はなく、怨みがあれば、張殿がそれを晴らしてくれる。』

ならば私はまっすぐな樹木（張殿の忠實な部下）となって、ずっと徐州の地に列なっていたい。また古人が奏でた琴瑟（情誼に厚い人間）となって、ずっと張殿にお聞かせしたい。大丈夫の心は、一振りの劍によってのみ、人に識られるものだから。

「張徐州」とは當時、徐州の刺史であった張建封のことで、李觀・孟郊・韓愈たちにとってはパトロン的な存在。貞元十二年（七九六）には檢校右僕射を加えられ、德宗の寵臣の一人であった（『舊唐書』卷一四〇「張建封傳」）。韓愈にも「贈張徐州莫辭酒」や「汴泗交流贈張僕射」などの贈詩があり、貞元十五

年（七九九）に汴州で亂が起こると、韓愈は一時、徐州の張のもとに身を寄せた。なお、華忱之の『孟郊年譜』はこの詩の繫年を貞元八年（七九二）としているが、それは『文苑榮華』卷二八八では詩題が「長安留別李觀韓愈因獻張徐州」となっているのを根據とする（『孟郊詩集校注』下冊第三七二頁參照）。

賦體部分が擴大しており、比興はわずかに第五・六句だけにしか見られない。ただ對句が多用されているため、詩歌としてのリズム感は保持されている。第十三句から第十六句までは韓愈と李觀が實際に登場し、この詩に瑞々しい生命を與えているが、こうした實名を記す手法は、曹植の「贈丁儀王粲」詩にも「丁生〔丁儀〕は朝に在るを怨み、王子〔王粲〕は自ら營むを歡ぶ（丁生怨在朝、王子歡自營）」というかたちですでに見え、また杜甫の「昔遊」詩にも「昔者、高〔適〕・李〔白〕と與に、晩に單父の臺に登りき（昔者與高李、晩登單父臺）」（『杜詩詳注』卷一六）とある。

第二十五句以降はやはり「願～」というフレーズを疊みかけ、古風な雰圍氣を釀し出す。また第二十七句の「古琴瑟」は、曹植の「王仲宣誄」に「吾と夫子〔王粲〕とは、義は丹青を貫き、好は琴瑟と和し、分は友生に過ぐ（吾與夫子、義貫丹青、好和琴瑟、分過友生）」とあるのに基づく語。曹植と王粲との交遊を、張建封と孟郊自身のそれに擬えたものである。

貞元期における韓愈と孟郊の贈答詩について（丸井）

答孟郊（孟郊に答ふ）　韓愈

1 規模背時利　規模　時利に背くも
2 文字覷天巧　文字　天巧を覷ふ
3 人皆餘酒肉　人は皆な酒肉を餘すも
4 子獨不得飽』　子は獨り飽くことを得ず』（以上、④敍事）
5 纔春思已亂　纔かに春にして思ひは已に亂れ
6 始秋悲又攪　始めて秋にして悲しみは又た攪る
7 朝餐動及午　朝餐　動もすれば午に及び
8 夜諷恆至卯』　夜諷　恆に卯に至る』（以上、④敍事）
9 名聲暫羶腥　名聲　暫く羶腥たるも
10 腸肚鎭煎炒　腸肚　鎭に煎炒す
11 古心雖自鞭　古心　自ら鞭つと雖も
12 世路終難拗』　世路　終に拗げ難し』（以上、④敍事）
13 弱拒喜張臂　弱く拒めば　喜びて臂を張り
14 猛拏閑縮爪　猛く拏めば　閑にして爪を縮む
15 見倒誰肯扶　倒るるを見て　誰か肯へて扶けん
16 從嗔我須齩』　嗔るに從せて　我れ須らく齩むべし』（以上、⑤抒情）

＊五言古詩　上聲「巧」韻：巧・飽・攪・卯・炒・拗・爪・齩

【語釋】○規模　氣概や才覺。孟郊のそれを指す。『三國志』卷二七「魏書」「胡質傳」に「規模・大略は父に及

ばず、精良に事を綜ぶるに至りては之（父）に過ぐ（規模大略不及於父、至於精良綜事過之）」（『校注』第三四頁所引）。○羶腥　（名聴が）人を引きつける。孟郊が貞元十二年（七九六）に進士科に及第したことを指す。もと生臭い食事をいい、「羶」は羊肉の、「腥」は魚肉のそれをいう。盛唐の高適「送郭處士往萊蕪兼寄苟山人」詩に「身上未だ曾て名利に染まらず、口中獨り未だ羶腥を知らず（身上未曾染名利、口中獨未知羶腥）」。○「弱拒」以下四句　自分を陥れようとする者たちとの争いを、武闘派風に描寫したものか。宋の樊汝霖は「此の聯は公（韓愈）子厚（柳宗元）が墓に誌して『陥穽に落つるも、一たびも手を引いて救はず、反つて之を擠し、又た石を下せり（落陥穽不一引手救、反擠之又下石焉）』と謂ふ所の者是れなり」（『集釋』第五八頁所引）とする。なお『校注』は最後の句を「此れ汝が嗔恨するに任せ、我も亦た能く切齒して之を忍ぶのみなるを謂ふ」（第三五頁）と解するが取らない。

【大意】あなたの氣概はこのご時世の利害とは相容れないが、あなたの文學には飾らない自然なうまさが窺われる。世の人たちはみな酒肉に飽いているようだが、あなたはひとり腹を滿たせずにいる。『

春になったばかりの頃から、あなたの思いは亂れがちで、秋になったばかりだというのに、また悲しみに苛まれている。朝飯はともすれば晝飯を兼ねて一食で濟ませ、夜に詩を吟じれば往々夜明けにまで至る。』

進士科には受かったけれども、はらわたはいつも煮えかえっており、古人のように純朴な心で勵んではいるけれども、世の中は良い方向には向かってくれない。』

近頃の輩ときては、こちらが下手に出れば喜んでつけあがってくるし、こちらが強く出れば爪を收めて尻ごみをする。人が倒れても手を差し伸べてなどくれるものか。怒りにまかせて噛みついてやればよいのだ。

『集釋』第五六頁に引く王元啓の説によれば、この詩は貞元十四年（七九八）、汴州を去ろうとする孟郊に韓愈が與えたものである。韓愈は當時、すでに長安を離れて汴州にあり、宣武軍節度使の董晉の幕下で觀察推官の任に就いていた。

この詩には比興的な歌い出しが全くなく、いきなり孟郊を語ることから始まっている。とりわけ第五句から第八句までは、孟郊の日常を生き生きと描き出している。韓愈詩における賦體の膨張・肥大化は、汴州以降の五言の贈答詩群においてさらに顯著になってゆくが、上掲詩はその先驅であろう。

賦體の缺點は、前稿に引いた南朝梁の鍾嶸の『詩品』總論に

「若し専ら賦體を用ふれば、則ち患ひは意の浮くに在り、意浮けば則ち文散ず（若専用賦體、則患在意浮、意浮則文散）」とあったとおり、作品としての凝集力が薄れ、詩意が散漫になってしまうことである。しかし韓愈がこうして比興によらずに詩を作るようになったのは、詩の散漫化、いな散文化をすら、もはや恐れなくなっていたからであり、賦體を多用しながら、それでも十分に讀み應えのある詩を作りうる、との自信を持ち始めていたからであろう。

比興とりわけ興は、歌おうとする內容の集約的な現象を自然のうちに見出して、それを主として詩の冒頭に置く修辭技法であったが、曹植ら建安詩人たちは、感情の急激な噴出を導く技法としてこの興を使っていた。[12] たとえば曹植の「贈王粲」詩の、

……
中有孤鴛鴦　哀鳴求匹儔『
我願執此鳥　惜哉無輕舟』
……

中に孤なる鴛鴦有り　哀鳴して匹儔を求む』（以上、比興）
我れ此の鳥を執へんと願ふも　惜しいかな　輕舟無し』（以上、賦體）

この箇所がその典型的なものである。そしてこうした興の傳統にもある程度配慮しながら、詩の贈答を行っていたのが孟郊であるとするならば、韓愈の贈答詩には、その冒頭から賦體を疊みかける形のものが貞元前期にすでに見られ、後期に入るとこの傾向はさらに顯著になってゆく。たとえば孟郊の「古意贈梁肅補闕」詩（貞元八年〔七九二〕作）の冒頭は、

曲木忌日影『
讒人畏賢明『
自然照燭閒『
不受邪佞輕『
……

曲木は日影を忌み』（以上、比興）
讒人は賢明を畏る』（以上、賦體）
自から然り　照燭の閒』（以上、比興）
邪佞の輕んずるを受けず』（以上、賦體）

賦體の多用に傾きながらも、比興の技法をなお引きずっていたのに比して、たとえば韓愈の「贈族姪」詩（貞元十五年作）の冒頭は、

我年十八九
壯氣起胸中
作書獻雲闕
辭家逐秋蓬『
……

我れ年十八九なりしころ
壯氣　胸中に起これり
書を作りて雲闕に獻じ
家を辭して秋蓬を逐ひき』（以上、賦體）

とあるように、賦體から說き起こす形が目立って多くなる。ま

た、孟郊の賦體が抒情的であるのに對して、韓愈の賦體は往々敍事的であることも、兩者の違いの一つとして擧げられよう。韓愈は古文も能くしたが、孟郊はもっぱら詩作に徹したという兩者の志向の違いも、この背景にはあるのであろう。

## おわりに

交遊や友情のかけがえのなさを訴える文學は、魏の曹植の贈答詩にその端緒が見られるが、それは比興や典故と賦體とを交互に繰り返す形態を採るものが主だった。また、孟郊の贈答詩には賦體の比重が徐々に增してゆく傾向が認められるものの、比興や典故を適宜插入し、賦體との平衡を保つ配慮がなお感じられる。一方、韓愈の贈答詩には賦體の大幅な膨張が顯著に窺われる。それは同志的結合を求めてやまず、同志との交遊のありさまを詩中に生き生きと描き出そうとした、韓愈の熱意の發露であった思われる。そして韓愈のこうした熱意の發露は、張籍（七六六–八三〇？）との出會いを綴った五言詩にも明らかに見て取ることができる。次稿では、韓愈が張籍に與えた「病中贈張十八」詩（五古、貞元十四年〔七九八〕、汴州での作）や「此日足可惜一首贈張籍」詩（五古、貞元十五年〔七九九〕、徐州での作）を、張籍の「贈孟郊」詩（五古、貞元十二年〔七九六〕和州での作）や「寄韓愈」詩（五古、貞元十五年〔七九九〕、汴州での作）などと對照しながら仔細に讀み、あわせてこれまで讀んできた韓愈の一連の贈答詩群に共通する特徵を考察してみたいと考えている。

**【注】**

（1）たとえば前稿でも觸れた杜甫の語「比興體制」（「同元使君舂陵行序」）などがその代表的なものである。

（2）松浦友久『中國詩歌原論』第三〇五頁、東京：大修館書店、一九八六。

（3）吉川幸次郎『詩經國風』上册第九–一〇頁。東京：岩波書店、一九八五。

（4）傍線は賦體部分を指す。以下同。

（5）「比興與場景片斷的互補性和互相轉化、也是漢魏五言的重要特徵。在一個單一的場景片斷中、句意必須連貫不斷、而且受到同一時間地點及敍述順序的局限、而比興的跳躍性恰好與之互補、可以開拓其表現的範圍、加强抒情表意的自由性。」「以場景片斷爲比興的手法在漢魏詩中得到了十分發揮」、「許多篇章都是在情景描寫中寄託寓意。」（以上、葛曉音『先秦漢魏六朝詩歌體式研究』「論漢魏五言的『古意』」第三一三–三一四頁、北京：北京大學出版社、二〇一二）

（6）「友情は、彼（曹植。引用者注）以後の中國の詩の最も重要な主題であり、男女の愛が西洋の詩でしめるのと同じほどの地位をしめるが、そのさいしょの點火者は曹植である。いいかえれば友情という人生の價値、その發見者は曹植で

ある」（伊藤正文注『曹植』巻末の吉川幸次郎氏による「跋」第二一九頁。東京：岩波書店、一九八四）。

（7）趙幼文『曹植集校注』（北京：人民文學出版社、一九八四）第四二頁に據る。

（8）訓讀はほぼ伊藤正文注『曹植』第三八-四〇頁に據ったが、若干改めた箇所がある。

（9）本稿で扱う孟郊詩は、四部叢刊本『孟東野詩集』に據る。

（10）「願爲雙鳴鶴、奮翅起高飛」（「古詩十九首」其五）、「願爲雙黃鵠、高飛還故鄉」（「古詩一首」（步出城東門））、「願子留斟酌、敍此平生親」（蘇武「詩四首」其一）、「晩穫爲良實、願君且安寧」（曹植「棄婦篇」）、「願爲比翼鳥、施翮起高翔」（曹植「送應氏二首」其二）、「翹思慕遠人、願欲託遺音」（曹植「雜詩六首」其一）、「願爲南流景、馳光見我君」（同其三）、「願欲一輕濟、惜哉無方舟」（同其五）など。

（11）劉開揚『高適詩集編年箋註』（北京：中華書局　二〇〇八）第一四八頁。

（12）参照：伊藤正文注『曹植』第二二頁。